【ポスターセッションの場合のみ記入 9pt 明朝・左端揃】

主題：障害者との共生に関する大学生の意識について３

○北星学園大学　豊村和真（会員番号 000049）

キーワード：障害　共生　意識

１．研 究 目 的

障害者に対する態度を改善するためには、その正しい現状を知る必要がある。しかしながら従来の調査による態度の調査には二つの問題点があった。一つは、ただ障害者に対する態度のみを質問することである。それは障害者に対する質問で、特定の行動・動作についての回答が仮に受容的ではなかったとしても、それはただちに障害者に対する態度の特性とは言えない。健常者でも同様に非受容的である可能性があるからである。

次に結果の安定性（信頼性）が不明なため、どの程度安定した結果（再現性が得られるのか）が判断できないことである。これは一般的な質問では、充分な回答数が得られればある程度は問題が少ないが、態度については、先行研究により対象に関する知識の程度や接触経験などにより左右されるといわれ、必ずしも一度の大量な回答で充分であるとは言えない面がある。

これらの２点の問題点を克服するよう数年にわたって検討を重ねてきたが、今回は主として回答の短期間の２回の変化についてリッカート法とコンジョィント分析の結果を報告する。

２．研究の視点および方法

被験者：62 名の男女に調査依頼をし、すべての項目に回答をした男子大学生 10 名、女子学生 37 名合計 48 名。

手続き：必修科目の講義科目の時間内で学生が 1 年次末と 2 年次初期に調査を実施した。間隔は 4 ヶ月であった。調査用紙は、学年性別等のフェィスシートに加え、健常者と障害者それぞれに「あなたの住んでいる地域に、これからＡさんという人が住もうとしています。もしＡさんが以下のような人だった場合、同じ地域で暮らしていく上であなたはＡさんのことをどの程度受け入れられますか？」という問い（対健常者）と、下線部分を「Ｂさんという障害者」に置き換えた（対障害者）教示文があった。以前に実施した予備調査によって得られた 4 要因から 3 項目ずつを選び、12 項目とした。因子名と各項目の略記形は、1)人当たり（「意地悪」「不快行動」「和を乱す」）2)人付き合い（「地域活動無」「近所付合無」「非社交的」）3)社会適応力（「周囲孤立」「無職」「会話未成立」）4)見た目（「顔立不整」「格好悪い」「可愛くない」）であった。これらについて７件法（不可１～可７）で回

答させた。なお、これらの項目の並びはこの順ではなく、また対健常者用と対障害者用で異なっていた。他に同時に因子を可能な限り合わせたコンジョイント分析用の質問項目があった。これらの回答後に、回答時にイメージしていた障害の種類（精神障害、知的障害、身体障害、障害全般、その他から選択記述）、過去１ヶ月以内の障害者との接触経験の有無、その自発／非自発性、そして経験の快／不快の程度、最後に再接触の希望の有無を回答させた。

３．倫理的配慮

質問紙配布の際に、回答は任意であること、研究以外の目的に使用しないこと、個人が特定されない配慮をすることを告げた。また、フェイスシート部最後に「本アンケートのデータを研究目的で使用してもよい」というチェック項目を用意し、回答者の同意を得た。

４．研 究 結 果

リッカート尺度の各質問項目を因子ごとに集計し平均値を求め各因子の受容度とみなした。

1 回目は「人付き合い（地域活動無、近所付合無、非社交的）因子」は対障害者のほうが値は小さくなっていた。その他は全て対障害者の値が大きく障害者に対して受容的であった。2 回目は 1 回目と比較して対障害者「人当たり因子」と対障害者「社会適応力因子」を除き全体として非受容的になったが、対障害者と対健常者を比較すると全ての因子で障害者に対して受容的になった。

コンジョイント分析は、平均相対重要度が最も高いのは対健常者では 1 回目（1 年次）は「社会適応力」27.7%、2 回目（2 年次）は「人当たり」53.8%であった。対障害者では 1 回目は「見た目」34.1%であったが、2 回目は「人当たり」46.6%であった。逆に最も平均相対重要度が低いのは対健常者では 1 回目は「見た目」19.3%、2 回目も「見た目」10.7%であった。対障害者では 1 回目は「社会適応力」17.5%であったが、2 回目は「見た目」0.6%であった。

５．考 察

リッカート尺度の結果は、1 回目と 2 回目を比較して、数値が低下していることから受容度が低下したと考えることもできるが、むしろ現実的になったと考えるほうが良いように思われる。全般的に 2 回目は 1 回目に比較して 4 の値に近づく、中心化傾向が見られている。そのなかで、対障害者では「社会適応力」のみがそれに反して数値が大きくなっていた。同様に、コンジョイント分析でも対障害者では 2 回目は「人当たり」と「社会適応力」が増え、「見た目」が著しく減った。これらのことから、今回の結果では障害者の受容はまず「社会適応力」に現れ、同時に「人当たり」が重視されるようになるではないだろうか。